

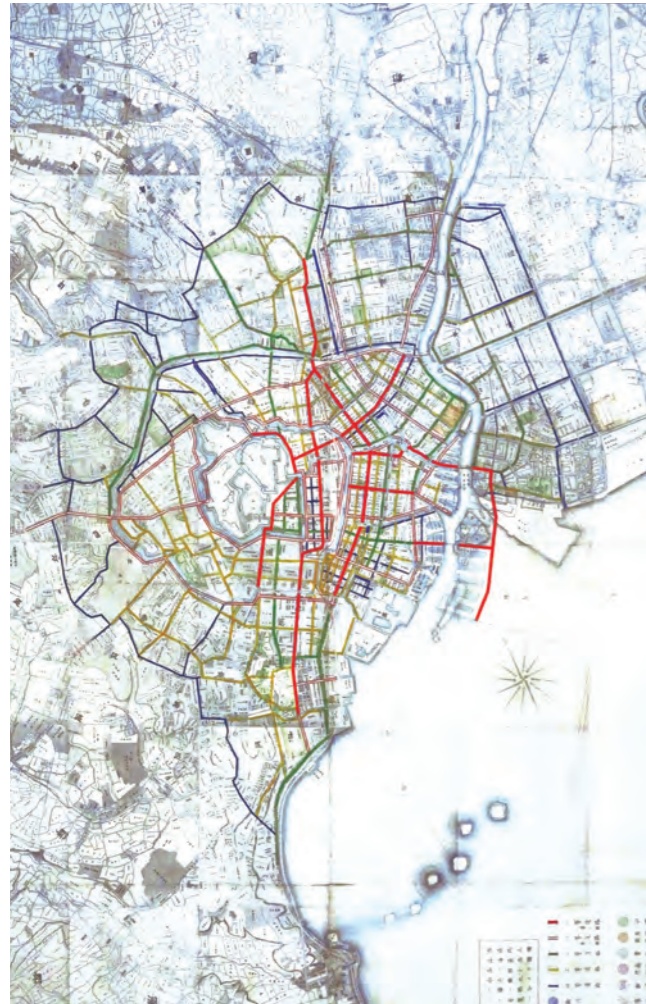
09 東京築港への道程

明治10—20年代における市区改正の検討の中では、東京の臨海部の計画も行われました。

当時の東京には、横浜港のような商業貿易を行う港がありませんでした。明治13(1880)年に、東京府知事松田道之によって提唱された「東京中央市区画定之問題」で初めて東京築港を提唱したものの、松田の死去によって立ち消えになりました。続く府知事芳川顕正が明治18(1885)年に「品海築港之議ニ付上申」において、東京港の築港を提案しましたが、事業予算等の問題や、横浜港のある神奈川県側の反対によって廃案となりました。明治31(1898)年に東京市が一般市となり、初代東

京市長に就任した松田秀雄の依頼により、明治32(1899)年に工学者である古市公威と中山秀三郎が築港計画を作成し、明治34(1901)年の帝国議会で可決されました。しかし、この計画を強く推進していた東京市議会議長の星亨の死去に伴い、東京市による築港計画も立ち消えになりました。

その後、河川からの流出土砂の堆積により船舶の入港が困難になったため、明治39(1906)年に東京港の全面築港策と分離し、第一期隅田川口改良工事が開始され、これが東京港の築港の端緒となりました。



明治18(1885)年修正 市区改正及品海築港略図 東京都公文書館蔵
東京市区改正審査会により作図された市区改正計画の全体図。佃島の沖合いに一大埋立地が描かれ、大型船舶が接岸できるドックが設けられています。



明治32(1899)年の築港計画図 東京港港湾計画平面図古市案
東京市「東京市史稿 港湾編4」国立国会図書館蔵
古市公威と中山秀三郎によって作成された築港計画案。東京湾の水深が全体的に浅いことから、船舶が停泊する港として機能するためには掘削が必要となることが提言されました。



明治期の東京港(佃島周辺)を描いた錦絵「佃島雨晴」(つくだじまあまはら)
小林清親筆、都立中央図書館特別文庫室所蔵
明治13(1880)年に発表された東京名所図の1つ。
佃島は、江戸時代に摂津国佃村(現在の大阪府北中部と兵庫県南東部)の漁師たちが渡来してきた場所であり、江戸時代から明治にかけて多くの漁師たちが暮らしていました。また、佃島が位置する隅田川河口部(江戸湊)では、多くの船が行き交いました。



明治期の河川舟運(日本橋川)
長崎大学附属図書館所蔵
明治期には、蒸気船が登場し輸送手段の近代化が進みますが、東京においては隅田川口改良工事により、小型の蒸気船が停泊可能となりました。また、蒸気船の補助機関として小型和舟も併用されました。

東京の埋立ての歴史

●明治期には、東京湾や隅田川の水深確保のために取り除かれた底の土砂で、佃島、月島、芝浦、芝海岸通りが埋め立てられました。大正期には、関東大震災で発生した瓦礫により豊洲が埋め立てられました。戦後となり、高度経済成長期には、品川ふ頭、辰巳、有明、台場、大井コンテナふ頭、青海コンテナふ頭が埋め立てられていきます。昭和31(1956)年には、東京港港湾計画(及びその改訂計画)が策定され、物流環境を整備するための港湾整備が推進されました。加えて、廃棄物処理のためのごみ処理場として、中央防波堤の内側・外側、羽田沖が造られていきます。この羽田沖は、平成に入ってから東京国際空港として利用されることになります。



明治以降の埋立て変遷図
出典:国土交通省関東地方整備局「東京港の変遷」に基づき作成。